

## NEWSレター

NPO活動紹介 特定非営利活動法人 松山さかのうえ日本語学校

## 松山から世界を拓く！

松山さかのうえ日本語学校は、外国人と日本人が「つながって、変わって、寄り添い合える社会」を作ることをミッションとして掲げ、単に留学生や外国人技能実習生の孤立を防ぐ支援にとどまらず、海外ルーツの子どもやシングル家庭の子育て支援など、地域に根差した取組みを続けています。

国際子ども食堂では、こうした取組みの一環として「支援する・される」という縦の関係ではなく、外国人と日本人が共に子育てや食の場作りを行うことを実践しています。そのため、自然とフラットなつながりが生まれ、新しい多文化コミュニティの形成につながっています。国際子ども食堂では、毎回担当国を決めて約100名分の料理を外国人と高校生・大学生が協力して調理しており、コロナ禍で開始して以来、延べ180回、15,100食以上を提供してきました。この場を通じて、海外ルーツの学生さんや赤ちゃん連れの親子も多く参加し、国を超えた交流が育まれています。また、子どもたちが「食堂」ではなく「子どもパーティー」と呼ぶように、明るく楽しい雰囲気が魅力です。こうした活動は、外国人の活躍の場を広げると同時に、日本人の意識変化を促し、将来のグローバルリーダー育成にもつながることを目指しています。

ゆうちょ財団は、多文化共生推進活動の2025年度助成先である同団体が、9月20日に松山で開催したイベント取材しました(写真1、2)。この日のプログラムは、前半がだるま職人さんと一緒に絵付けをしてだるまをつくるイベント、後半がコリアンdayで韓国料理を楽しむ国際子ども食堂でした。



写真1：国際子ども食堂で提供される料理を用意するボランティアの方たち



写真2：だるまの絵付けイベントのもよう

## 外国人ボランティアの声

—最初にご自身のことを教えてください。

**レディーさん**(写真3):インドネシアから来ました。大学院博士課程で、農業に関する研究しています。

**ヴィッキーさん**(写真4):インドから来ました。会社から日本に派遣されています。

—このイベントに参加しようと思ったきっかけは何ですか。

**レディーさん**:インドネシアの学生仲間と「インドネシアデー」を企画したのがきっかけです。子どもや地域の方と文化を共有できる活動に魅力を感じました。

**ヴィッキーさん**:子どもと関わるのが好きで、友人の紹介で参加しました。食事作りも楽しみですが、何より子どもたちと過ごす時間が楽しいと思いました。

—イベントを通じて何か発見や楽しいことはありましたか。

**レディーさん**:日本人や他国の友人と共通の趣味や文化を通じて仲良くなれることを実感しました。料理や遊びを一緒に楽しむ時間がとても嬉しいです。

**ヴィッキーさん**:子どもたちと遊んだり料理を作ったりする中で、日本の家庭の様子や文化を学べました。異文化交流の楽しさや発見が多くありました。



写真4: ヴィッキーさん

9月20日の国際子ども食堂のイベントでは10名程の外国人ボランティアの方が参加されていました。今回はまだ夏季休暇を利用して帰国されている方が参加されておらず、普段よりも若干少ないとのことでした。今回、レディーさんとヴィッキーさんにインタビューしました。



写真3: レディーさん

—日本の人たちや他の外国人と交流して、どんな感想をもちましたか。

**レディーさん**:日本に来たばかりのころ、珍しい服装をしていて注目され、「何か間違っているのかな」と感じたことがありました。でもその経験を通して、多くの人と友達になりたいと思うようになりました。共通の趣味を通じて、みんな同じ人間だと感じています。

**ヴィッキーさん**:来日当初は肌の色を気にされるか心配でしたが、周囲の人は驚くほど自然に受け入れてくれました。髪の毛のスタイルを褒めてもらうことも多く、日本語で話してくれる人もいて安心しました。交流では、言葉で理解し合うことの大切さを実感しました。

—日本での生活で困っていることはありますか。このイベントがその助けになっていますか。

**レディーさん**:日本語の会話練習は独学だけでは難しいですが、このイベントで実践的に学べるのが助かります。友人もでき、料理を楽しむ機会にもなっています。

**ヴィッキーさん**:生活自体は困ることは少ないですが、この場で子どもや友人と関わることで多くの経験を得られ、交流の幅が広がり自分の学びにもなっています。

—ありがとうございました。

## 参加したご家族様の声

——「国際子ども食堂」に参加しようと思ったきっかけを教えてくださいませんか。

**お父様**：もう何回も参加しています。子どもができたことが参加の大きなきっかけになりました。それに、テレビやニュースで地域の子ども食堂の活動を見て、興味を持ちました。以前は小規模で、週に一回モデルハウスを使って行われていたことも知っていました。



写真6：国際子ども食堂で提供されたハラール韓国料理

## 坂口さんへのインタビュー (イベントの日本人スタッフ)



写真7：松山さかのうえ日本語学校スタッフの坂口さん

今回のイベントに日本人や外国人の多くのお子さんが参加しました。その中から1組の日本人のご家族（お父様、お母様、お子様2人）にインタビューしました。

——参加してみて新しい発見はありましたか。

**お父様**：はい、ありました。例えば、ハラールとかに関しては普段あまり意識していなかったので、インドネシアの方やイスラム教の方との交流を通じて意識するようになりました。お菓子を渡しても大丈夫かな、と最初は迷いましたが、こうした経験を通じて、交流の仕方や気遣いを学ぶことができました。

——こうしたイベントは地域にどのような影響をもたらすと思いますか。

**お父様**：普段の生活では、松山で多くの外国の方と関わる機会はあまりありません。でも、このイベントを通じて「いろいろな人がいる」という前提で考えるようになりました。例えば、ヒジャブ※を付けている外国人の女性がいる場面でも特に意識せず接することができるなど、地域の方々の意識に良い変化が生まれるのではないのでしょうか。

※頭を覆うスカーフ

——どうもありがとうございました。

——このイベントにはどのくらいの期間携わっているのですか。

**坂口さん**(写真7)：私はこのイベントに約三年前から関わっています。このイベントに参加したきっかけですが、もともと私は海外に興味があり、これまでに24か国ほどを訪れたことがあります。とても素晴らしい経験でした。

以前は週一回のペースで子ども食堂を行っており、その頃の参加人数は今ほど多くはありませんでした。当時はモデルハウスを借りて開催していたため、人数が増えるときゅうぎゅうになることもありました。現在は会場も広くなり、参加者も100人以上になることがあります。申し込みが殺到することもあり、倍率は約1.4倍になります。

——参加者の支援にもっと役立つために今後取り入れたい工夫はありますか。

この会場のキャパシティには限りがありますので、できればもう少し広い場所で開催できると、多くの参加者を受け入れられるようになると思います。現在でも百人規模の参加者はかなり多いのですが、それでも入れない方がいらっしやいます。限られたスペースでは多くの人を受け入れることが難しいのが現状です。もし広い会場やキッチンなどの設備が整った場所があれば、さらに多くの方が安心して参加できると思います。

## 松山さかのうえ日本語学校理事長 山瀬様に聞きました

——「国際こども食堂」を始められたきっかけや背景を教えてください。

**山瀬さん**(写真8)：この活動は5年前、コロナ禍の真っ最中に始まりました。きっかけは、留学生をはじめとする外国人の方々が、授業のオンライン化やアルバイト喪失、帰国困難などで深刻な孤立状態にあったことです。人が集まるイベントが難しい中で、外国人が活躍しながら孤立を防げる仕組みとして「国際こども食堂」を考えました。当時、地方ではまだ珍しかった取り組みでしたが、地域や留学生からの共感と応援を得て、継続的な活動へと発展し、今では5年目を迎えています。

——この活動を通じて、地域社会や参加者にどのような変化が生まれたと感じますか。

**山瀬さん**：大きく二つの変化を感じています。

一つ目は、子ども食堂へのイメージの変化です。活動当初は認知度が低く、その後は「貧困支援の場」という印象が強まり、「行くのが恥ずかしい」と感じる人も増えました。しかし「国際こども食堂」は「国際」という言葉のおかげで開かれた印象があり、「行きたい」「楽しい」と言ってもらえる場になり、子ども食堂のハードルを下げられたと感じています。

二つ目は、外国人へのイメージの変化です。以前は接点が少なく、ニュースの影響で偏見がありましたが、外国人が支援する立場として活躍することで、地域にポジティブな印象が広がりました。今では、外国人を自然に受け入れ共に活動する雰囲気生まれていると感じています。

——過去の開催で印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

エピソードはたくさんあります。その中で特に印象に残っているのは、5歳の女の子に留学生が母国語（ヒンディー語）での彼女の名前の意味を教えたことです。彼女は自分の名前にこんな意味があるんだと知って、とても喜んでいました。「自分の名前が大好きになった」と後日親御さんから聞き、とても嬉しく思いました。彼女は、嬉しそうに自分の名前の意味を周りの人にも伝えていて、自分の名前に誇りを持っている様子がとても印象的でした。このような交流は、本当に良い経験だったと思います。

——坂口様、どうもありがとうございました。



写真8：松山さかのうえ日本語学校理事長の山瀬さん

——今後の「国際こども食堂」の展望や、松山さかのうえ日本語学校の活動について教えてください。

**山瀬さん**：自分の役割は「活動資金の確保」と「地域の安全・安心の維持」と考えています。今後もこの二つを果たしつつ、地道に活動を続けたいと思います。「国際こども食堂」は2020年にここ松山から始動したのですが、最近は県外から「運営方法を知りたい」「自分たちの地域でも始めたい」という相談が増えています。特に行政や教育関係者から、海外ルーツの住民との関わり方や食事対応について具体的な質問が寄せられ、他地域への波及支援が新たな目標です。

また、松山さかのうえ日本語学校の活動を通じ、若者が「自分たちでも何かを作れる」と感じるようになり、「同じような活動をしたい」という声も出てきました。今後はそうした若者を支援し、松山を「多文化共生が進むまち」として広め、地域資源を活かしたモデルを全国に発信していきたいと考えています。

——山瀬様、どうもありがとうございました。

## 2026年度活動助成の募集について

2026年度NGO海外援助活動助成・多文化共生推進活動助成の申請を募集しています。

これらは海外で活動を行っている日本のNGO団体や、多文化共生の推進に寄与する活動を行う民間団体に対して、活動経費の一部を助成するものです。助成件数は多文化共生推進活動助成で5件程度、NGO海外援助活動助成で10件程度、助成の上限額は1件100万円(共通)とします。申請は本年10月1日から10月31日まで受け付けています。詳しくはゆうちょ財団HPをご覧ください。

[http://www.yu-cho-f.jp/international/ngo\\_grant.html](http://www.yu-cho-f.jp/international/ngo_grant.html)



## 「グローバルフェスタJAPAN 2025」への出展について

「グローバルフェスタJAPAN」は国際協力活動、社会貢献活動、SDGsなどに取り組む官民様々な団体が一堂に会する国内最大級の国際協力イベントです。2025年度は9月27日(土)と28日(日)の2日間、新宿住友ビル三角広場で開催されました。

ゆうちょ財団は、今年もブースでの活動の写真パネルの展示等を通じて、NGO・NPOへの助成について一般の方々に周知を行うとともに、NGOやNPOの方々に助成の申請募集についてご案内しました。



(写真7) 会場準備の様子



(写真8) ゆうちょ財団のブース



## 編集後記

松山城の麓で、国際理解を深めてもらうために日本で就職や留学をしている外国人と日本人が参加できる「国際子ども食堂」を開催している「松山さかのうえ日本語学校」の活動を取材させていただきました。外国人と日本人老若男女100名以上の方が参加し、ミニ達磨の色付けイベントで個性豊かな達磨を完成させ、国際子ども食堂では今回のテーマ食「韓国料理」に舌鼓をうち、わいわいがやがや皆さんが楽しい時間を過ごされ、取材していたこちらにも楽しさが伝わってきました。ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

この取材の次の週には東京で開催された「グローバルフェスタ2025」にも参加し、開発途上地域で国際協力活動をしているNGO等の皆さんと交流ができました。2026年度の活動助成募集では助成件数を増やし、地道な活動を継続的に支援していきたいと思っています。